

335, 1953) が *C. gunnii* と同一種なりとし、次いでメルボルンの Willis もこれに同意し *C. gunnii* の小形のものとしている。そこで私は Cunningham が彼の論文に載せた図のもとになった標本 (Fig. 5C の左端の菌) を紹介するに止める。これは私が 1963年にオークランド訪問の際 Dingley 女史の厚意により撮らせて戴いたものである。

○モクレンとハクモクレン並びにサラサレンゲの学名について (大場秀章)

Hideaki OHBA: Notes on *Magnolia conspicua* Salisb. var. *purpurascens* Maxim.

この小文ではモクレンとハクモクレンの学名を正し、サラサレンゲの分類学上の位置を定め新学名を提唱した。

モクレンとハクモクレンの学名として、現在は Lamarck の *Encycl. Méth. Bot.* 3 巻 (1791) 中に発表された *Magnolia liliflora* Desrousseaux と *M. denudata* Desrousseaux が一般に用いられている。ところがすでに Dandy (1934) が指摘しているとおり、この両種には先行する学名がある。Buc'hoz は 1779 年に *Plantes Nouvellement Découvertes* の中で *Lassonia* という新属を設け、*L. quinquepeta* と *L. heptapeta* の 2 種を分類した。この 2 種はモクレンとハクモクレンであり、モクレンには *Magnolia quinquepeta* (Buc'hoz) Dandy, ハクモクレンには *M. heptapeta* (Buc'hoz) Dandy の学名を用いるのが正しいとした (Dandy 1934)。他方、栽培されるアジア産のモクレン属のモノグラフを纏めた Johnstone (1955) は、図や記載の不正確さを大きな理由に Buc'hoz の学名を斥けてしまった。この両種の種名となった 'quinquepeta' と 'heptapeta' はそれぞれ '5 花弁性の' および '7 花弁性の' という意味であり、3 個の萼片と通常 6 個の花弁を有するモクレンならびに通常 9 個の花被片をもつハクモクレンの花被片数とは相容れないことに象徴されるように、Buc'hoz の記載と図には誤謬が多いとされるが、Dandy が再録している Buc'hoz の記載は花被片、苞 (Buc'hoz は萼としている)、雄蕊の色などに関して実際の植物とよく一致するように思われる。しかも今日一般に用いている Desrousseaux の記述と引用文献にも他種との明らかな混同があり、不正確であるという理由だけで Buc'hoz の学名を斥けることはできず、Dandy の意見に従い Buc'hoz の学名を採用するのが正しいと考える。

サラサレンゲはハクモクレンに大変よく似た植物で、その分類学上の取り扱いに関しては種々の見解があったが、ここではその分類学上の位置を定め、新学名を提唱することにした。サラサレンゲは最初 Maximowicz (1872) によって *Magnolia conspicua* Salisb. (これはハクモクレンである) の変種として認められ var. *purpurascens* と名付けられた。しかし、その原記載には "Colitur rarius in Yedo, japonice sarasa-rengé" [(江戸で稀に栽培される。日本名サラサレンゲ) の意] と記されているだけで植物自体の特徴は何も述べられていない。そこで日本人の手になる江戸時代の文献にあたってみると、

岩崎常正(灌園)の本草図譜(1828年刊。刊行年に関しては白井光太郎:改訂増補日本博物学年表(1934)による)にサラサモクレンの名で図示されていることが判った。1920年の複製版(白井光太郎和名考訂,大沼宏平学名考訂)では巻77のモクレンの1種として14丁裏にあり,“樹葉ともに志もくれんに似て花は少し小く内微し紫色を帯び外は濃し”の文が同じ14丁裏に挿入されている¹⁾。白井はその和名をサラサレンゲ,大沼は学名を *Magnolia denudata* Desr. var. *purpurascens* Rehd. et Wils. とした。

伊藤圭介・賀来飛霞(1881)は東京大学小石川植物園草木図説でサラサレンゲをモクレンの1種とし(学名には *M. obovata* Thunb. を用いている),‘此樹亦漢種ナリ,枝葉木蘭ニ似テ,花少シ小ク,八九弁,内白色ニシテ淡紫ヲ帯ビ,外紅紫色ノ量アリテ,弁縁ニ至テ稍々白シ,……’と記している。加藤竹斎筆になる原色図は極めて精緻で,開花直前と開花時の花が各1,雌雄蕊群,子房,雄蕊の拡大図,および盛夏の頃のものと思われる葉が1枚,原色を想起させる色調で描かれている。なお,本図譜に先立って出版された伊藤圭介による小石川植物園草木目録(1877)ではサラサレンゲを‘*Magnolia* sp. サラサレンゲ 木蘭一種’として登載している。

松村任三は1884年の日本植物名彙でサラサレンゲに *M. obovata* var. *purpurea* (Curtis) Sweet の学名を当てた(但し, var. *purpurea* Curt. としている)。この学名のもとになった Curtis の *M. purpurea* はモクレンとされている(Johnstone 1955)。その後,松村は帝国大学理科大学植物標品目録(1886)および改訂増補植物名彙(1895)で de Candolle (Prodromus Regni Vegetabilis 1巻(1824) p. 80)の記載から判断して,サラサレンゲの学名に *M. obovata* var. *discolor* DC. を採用した。しかし, de Candolle の学名のもとになった Ventenat の *M. discolor*—Jardin de la Malmaison 1巻(1803) 24図(Redoute の筆になる)に発表された—もモクレンとされている(Millais 1927, Johnstone 1955 等)。大久保三郎も帝国大学植物園植物目録(1887)で同じ学名を採用している。松村はその後帝国植物名鑑第2巻(1912)で *M. conspicua* var. *purpurascens* Maxim., 改訂植物名彙後編(1918)では新たに後に述べる Rehder と Wilson による *M. denudata* var. *purpurascens* (Maxim.) Rehd. et Wils. をサラサレンゲの学名とした。

Rehder と Wilson (1913) は *M. Sprengeri* Pamp. をサラサレンゲにあて,中国大陸中部に自生すると考えた。そしてハクモクレンの正しい学名とした *M. denudata* に Maximowicz の var. *purpurascens* を組替えた。しかし,サラサレンゲはその後の研究が進むにつれて *M. Sprengeri* とは別な植物であることが明らかにされた(Stapf

1) 筆耕人に作らせたと考えられる小石川植物園との名称が版心に入った写本のひとつでは,サラサレンゲは巻80の15丁裏にあり,挿入文も若干異なり,‘樹葉とも尔志もくれん尔似て花ハ微し小く内微し紫色を帯び外ハ深し’と記されており,諸写本間に若干の違いがあることを示唆している。

1927, Rehder 1940, Johnstone 1955)。

その後、サラサレンゲをモクレンとハクモクレンの雑種に由来するとする説も発表された (Makino 1929, 石井 1955)。他方、モクレンとハクモクレンとの交配によって作出された園芸種にニシキモクレン *Magnolia* × *Soulangeana* Soul. があり、Makino (1929) が記載した *Magnolia dorsopurpurea* Makino サンシキモクレン もこれに該当すると思われる。しかし、サラサレンゲとニシキモクレンはよく似ていても、ニシキモクレンでは花被片は萼片と花卉に明らかに分かれ、萼片は花卉の半分位の大きさであるのに対して、サラサレンゲの花被片はすべてほぼ同形同大という大きな違いがある。しかし、ニシキモクレンとサラサレンゲを混同していることもある。上原 (1959) がサラサレンゲとした植物の一部は明らかにニシキモクレンである。

サラサレンゲの花卉の形は倒卵形から長卵形でハクモクレンに一致し、明らかにモクレンと異なり、またモクレンよりも幅が広い。葉の形、質などその他の形質についてもサラサレンゲはハクモクレンによく一致する。しかし、サラサレンゲは花被片の外縁が紅紫色になる点で明らかにハクモクレンと異なる。また、開花期もハクモクレンよりは東京で 1 週間程遅い。そこでサラサレンゲをハクモクレンの花被片の色変り品種として取り扱うのがよいと考え、学名を *Magnolia heptapeta* (Buc'hoz) Dandy forma *purpurascens* (Maxim.) H. Ohba と改めた。

なお、研究に主に用いたサラサレンゲは東京大学理学部附属植物園小石川本園に植栽されているもので、このまだ若い 1 木の母木は古くから同園に植えられていたと言われている。しかしその来歴の詳細は定かでない。ただし細かな点までよくこの個体と一致する標本が 1878 年に小石川植物園で採集されていることから、この若木はすでに江戸末期から小石川に植栽され、伊藤圭介・賀米飛霞 (1881) によって描かれたサラサレンゲの子孫と推察される。

Magnolia heptapeta (Buc'hoz) Dandy in Journ. Bot. 72: 103 (1934).

Lassonia heptapeta Buc'hoz, Pl. Découv. 21, t. 19 fig. 1 (1779); Grand. Jard. Univers t. 131 (1785), ut '*heptapetala*'.

Magnolia denudata Desr. in Lam., Encycl. Méth. Bot. 3: 675 (1781), pro maj. parte, excl. syn. Kaempf., Amoen. et Thunb.

forma *purpurascens* (Maxim.) H. Ohba, stat. et comb. nov.

Magnolia conspicua Salisb. var. *purpurascens* Maxim. in Bull. Acad. Sci. St.-Petersb. 17: 419 (1872), descript. ut "Colitur rarius in Yedo, japonice sárasa-renge"—Matsumura, Ind. Pl. Jap. 2: 94 (1912)—Makino et Nemoto, Fl. Jap. 939 (1925).

M. denudata Desr. var. *purpurascens* (Maxim.) Rehd. et Wils. in Sargent, Pl. Wils. 3: 401 (1913), excl. pl. chinensibus cit.—Matsumura, Shokubutsu-Mei-

I, rev. et enlarg. ed. part 2, [242] (1918).

M. purpurascens (Maxim.) Makino, Journ. Jap. Bot. 6: 8 (1929)—Nemoto, Fl. Jap. Suppl. 240 (1936).

M. obovata (non Thunb.) Ito [et Kaku], Koishikawa Shokubutsuen Sômoku Zusetsu 1: 8 et 10 (1881), in pagina 10 ex toto tabula colorata a Chikusai Kato; cum nom. jap. "Sarasamokuren".

M. obovata (non Thunb.) var. *purpurea* (non Curtis) Matsumura, Nippon Shokubutsumei [118] (1884).

M. obovata (non Thunb.) var. *discolor* (non DC.) Matsumura, Cat. Pl. Herb. Coll. Sci. Imp. Univ. (Tokyo) 8 (1886); Shokubutsu Mei-I [181] (1895)—Okubo, Cat. Pl. Bot. Gard. Imp. Univ. (Tokyo) 9 (1887).

A typo perianthiis extus purpurascentibus differt. A *Magnolia* × *Soulangeana* Soul. perianthiis aequimagnis numero vulgo 9 haec forma bene dignoscenda.

Anthesis [saltem post Idus Martias Tokyoensi] quam illa typi minute serotior. Perianthia numero vulgo 9, fere aequimagna, extus basi et secus venas primum pallide purpurea deinde saturater purpurascentia, extus parte cetera primum lactea dein perpallide purpurascentia, intus lactea, obovata—oblongo-obovata, anthesis initio 5—8 cm longa 3—4.5 cm lata, sub anthesis finem 8—11 cm longa 5—7 cm lata. Anthera ante dehisceniam saturate eburnea.

Specimina exam. Japonia. Tokyo cult. (F. Maekawa s.n., Aug. 1946, τ_1); Ex arbuscula quae Hort. Bot. Univ. Tokyo. Koishikawa. colitur (H. Ohba & S. Akiyama 75, 17 Mar. 1979; H. Ohba 79301, 20 Mar. 1979; 79301 bis, 22 Mar. 1979, τ_1); loc. cit. (coll. ignotis s.n., 1878; s.n., 14 Apr. 1880; s.n., 1880, τ_1); Tochigi Praef. Ex arbuscula quae Horto templi Jyokoji Nikkoensi colitur (H. Ohba 80501, 21 Mai. 1980, τ_1).

引用文献 Dandy, L. E. 1934. The identity of *Lassonia* Buc'hoz. Journ. Bot. 72: 101-103. 石井勇義 1955. ほうのき属 *Magnolia*. 園芸大辞典 5: 2215-2219. 伊藤圭介・賀来飛霞, 1881. 東京大学小石川植物園草木図説巻1, 東京大学. Johnstone, G. H. 1955. Asiatic Magnolias in cultivation. London. Makino, T. 1929. *Magnolia dorsopurpurea* Makino and *Magnolia purpurascens* (Maxim.). Journ. Jap. Bot. 6: 8. Maximowicz, C. J. 1872. Species Magnoliae. Bull. Acad. Sci. St.-Petersb. 17: 417-419. Millais, J. G. 1927. Magnolias. London. Rehder, A. 1940. *Magnolia* in Man. of Cult. Tr. and Shr. 2nd ed., 246-252. — & E. H. Wilson, 1913. *Magnolia*. In: Sargent, C. S., Pl. Wilson. 1: 391-

409. Stapf, O. 1927. *Magnolia Sprengeri diva*. Curtis's Bot. Mag. 152: t.
9116. 上原敬二, 1959. *Magnolia*. 樹木大図説 1: 1058-1086.

(東京大学理学部附属植物園日光分園)

□中沢信午：遺伝の法則にいだむ。メンデル伝 221 pp. 1980年. 国土社, 東京. ¥980.
メンデル伝は何通りもでている。これはその生地モラビアの文化との続きに於て、メンデルの生涯を描いたものである。遺伝の法則を発見した人、メンデルを生んだ時代、メンデルの実験、メンデルの法則、修道院長メンデルの五章で彼の生涯をたどり、「メンデルの法則世に出る」でメンデルの法則が再発見された有様を述べ、最後に「現代への発展」として、遺伝学上劃期的な事実をいくつか述べて終っている。著者はメンデルを頭に描いてチェッコの地に渡航し、その遺蹟遺物をよく調らべて書いたものだから、描写がいきいきとしている。メンデルが予想に反して気象の観測家としても重要であったことや、税金の重さに抵抗して11年も戦った事なども書かれている。「世界を動かした人びと」の第11巻として出たが、ひろくもう一度メンデルの人となりと業績とを、モラビア文化との関連に於て見てほしいものである。(前川文夫)

□自然観察と自然保護研究会編：新季節の手帖 東京の自然をたずねて 10×15 cm. 172 pp. 1980. ¥350. 東京都内に自然の残されている場所12ヶ所をとりあげて、身近に自然の観察を行う手引書として作られたものである。素人が自然を観察するのにはどのようにしたらよいかを、地質、動植物を中心にして述べている。自然が人の生活に大切な関わりがあり、また自然に無関心な人の行動が、そこに生活している生物にいか大きな影響を及ぼしているかを、観察をとうして体験しうる立場で書かれている。各場所の特徴を生かし、新浜の秋の渡り鳥、清澄公園の雑草、狭山丘陵の冬の雑木林など、場所により季節により、観察する対象を重点的にえらんで述べている。

参考書や頭で作られたものでなく、すべて実地での体験をもとにして書かれていて、自然を観察する入門書としてすぐれたものである。各地でこのようなものが作られることが望まれる。この本は初心者への入門書であり、もう少し自然の生物の生活にふみこんだ入門書が、自然観察の実行をとうして作られたらと思う。入手は[REDACTED] [REDACTED], [REDACTED] 送料120円。(山崎 敬)